

失敗者そして名もなき愚か者たちのための〈超越の書〉—  
メタフィクションとして読む Paul Auster, *The Brooklyn Follies* (2005)

The Book of Transcendence for Failures and Ordinary People:  
Reading Paul Auster's *The Brooklyn Follies* (2005) as Metafiction

中 谷 ひとみ  
NAKATANI, Hitomi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第48号 2019年12月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.48 2019

## 失敗者そして名もなき愚か者たちのための〈超越の書〉— メタフィクションとして読むPaul Auster, *The Brooklyn Follies* (2005)

中谷 ひとみ

### 1. 失敗者を生きること、愛すべき名もなき人々に寄り添うこと

人はそれぞれ人生の辛い、過酷な、耐えがたい局面に遭遇する。艱難辛苦を克服して前進する人もいれば、トラウマに押し潰される人も、失敗者として生き続ける人もいる。Paul Auster, *The Brooklyn Follies* (2005, 以後BFと略す)には様々な失敗者が登場するが、Tom Wood は典型的な例と言ってよからう。コーネル大学を首席で卒業し、四年間の奨学金を得てミシガン大学大学院に進む。野心的なテーマの博士論文に真剣に取り組むも、自分に力がないことを悟って退学する。28歳でニューヨークへ出てタクシー運転手となり、今は古書店の店員だ。小説の語り手・主人公は、七年ぶりにそこで偶然出会い、以後彼に寄り添う伯父の Nathan Glassである。彼の目には、かつての甥は羨ましいほどの才能の持ち主であり、今頃は新進気鋭の文学者として一流大学で職を得て、研究を続けているはずであった。ネイサン自身、大学で英文学を勉強した後、それを引き続き学ぶかジャーナリズムの世界に挑戦するかの迷いや夢があったが、勇気ある決断ができる前に、二年の兵役、仕事、結婚、家族を持った責任に翻弄されてきた。「人生を一步踏み出す度胸のない人間が嵌る泥沼に陥って抜け出せない。」(13) 彼は娘の Rachel から「残酷で自分勝手、母さんが離婚するのも無理ない」(2) となじられ、関わりも持ちたくないと思われる父親だし、甥は三年も妹の Aurora (Rory) に会ってもいないし連絡も取り合っていない。彼女の子供で九歳半の Lucy は家出して来たが、喋ることを拒否している。「自分の一族を恥じているわけではないが、無茶苦茶で無様な人間の集まり、人間の不完全さの衝撃的な例の寄せ集め」(174) だと、主人公は我ながら呆れている。彼に言わせれば、失敗者や益体もないろくでなしの一族なのだ。自分も例外ではない。しかし順風満帆の人生など何処にあるのか。

癌の治療中ではあるが、それでもネイサンは甥や一族の人々を温かく見守る。小説には彼の一族以外にも、失敗者や問題のある人物が多く登場する。しかし重要なことは、文学を学んだ主人公がずっと本に対する興味を失わず、今は人々の群像を書き続けていることである。小説などを書くことはなかったが、彼は読書を通して物語や語り方を身近に感じてきたと推測される。読書は仕事や人生からの「逃避、慰め、癒し、興奮剤であったが、彼は純粋に楽しいから本を読んだ。著者の言葉が自分の頭の中で鳴り響くときに訪れる素晴らしい静けさ ("beautiful stillness") を求めて、読書した。」(13) 保険の外交員の仕事も、人に共感したり、言葉を操って説得したりすることに長けていく助けとなったはずだ。久方ぶりに甥と出会い彼に両腕で抱きしめられた時は、「涙が溢れて

きたので自分でも驚いた」(20)ほどの深く豊かな情感の持ち主である。単にセンチメンタルなのではない、人間的で魅力的な人物なのだ。

小説の最終場面でネイサンは、心配した心臓発作ではなく、激痛ではあったが単なる食道炎で、病院に救急搬送されるが、退院を許されて幸福感に浸りながら街頭に出ていく。「清々しい朝、この上なく深く青い空」で、「生きていることが嬉しくてたまらず、大声で叫びたい気分だ。」(303)しかし時は「2001年9月11日8時、一機目の飛行機が世界貿易センターの北タワーに激突する46分前である。その二時間後、三千の焼死体から上がる煙がブルックリンの上空を漂い、灰と死の白い雲となって我々の身に降り注ぐことになる」(303-4)と、9/11テロは明言されないが、示唆される。そのためこの小説は現実の9/11事件との関連で論じられることになる。一見、自然な解釈ではあろう。9/11を扱った、あるいはそれを背景とした社会的状況がメインテーマの一つである小説としては、Don DeLillo, *The Falling Man* (2007) が挙げられる。<sup>1</sup> デリーロは事件直後、エッセイ "In the Ruins of the Future: Reflections on Terror and Loss in the Shadow of September" で自分の考えを表明している。しかしオースターの『ブルックリン・フォリーズ』<sup>2</sup>は『落ちる男』と同様の「ポスト9/11小説」と言ってよいのだろうか。確かに示唆されているが、9/11はこの小説の最も決定的で主要なテーマなのか。

疑問を持つ理由は二つある。第一に、オースターは「1990年代半ばに…ブルックリンを舞台にした群像型小説」*BF*「に着手したが、映画に手を出したことで…中断していた。」再開したのは、ブッシュ政権(2001-8)初期の「『ぞっとするような時代』」(飯野 編 260)である。この頃は2000年の大統領選などがあり、オースターの政治・社会的関心が大きい時期であった。<sup>3</sup>また、*The Book of Illusions* (2002) から *Oracle Night* (2003), *BF, Travels in the Scriptorium* (2007), *Man in the Dark* (2008) と五作続けて「『自分の人生が何らかの意味で終わってしまったと感じている男の物語』」を、また*BF* から *Travels in the Scriptorium*, *Man in the Dark* の、「『中高年の物語』」を三作続けて書いている(訳者・柴田あとかき 325)と考えることもできる。オースター自身の言に基づく分類であり、病気の主人公のことを考えれば*BF*が「人生が終わってしまったと感じている中高年男性」の物語であるとは確かに言える。しかし*BF*でプロットを牽引し、また印象的なのは、彼が語る失敗者たちや家族の群像であり、名もなき愛すべき人々に寄り添い、伝記保険を考案して彼/彼女らの物語を書き残すことを決意する主人公が、語り手としても人間的にも成長していく過程である。彼を中心にした人間模様がオースターの本来書こうとしていたことであろう。彼自身、人間の「心理や世界についての哲学的問題に興味があり」、小説家として「非常に深い感情的問題であるが、生きるに値する重要なことでもある愛と死、苦しみ、喜び ("… love and death. Human suffering. Human joy")」を探求している」(Huchisson ed. 161)とインタビューで述べているからである。

作者のこの関心は、再起を図る登場人物たち—主人公、トム、詐欺の前科があるHarry—が旅

の途中で投宿するホテルの名前"Hotel Existence"からもうかがわれる。ハリーは"existence"(存在)という語の「響きが気に入っている。…単なる生 (life) よりもっと大きな概念であり、すべての人間の生を足した総和」(BF 101) のように思われるからである。このホテルは彼らにとっての憧れの場であり、ユートピア的场所、あるいは現実から逃れられる夢、一時のオアシスであるが、その命名と意味—実存ホテル、実存という生の館—は、それに関して彼らのみならず作者自身が抱く関心の深さをも示しているだろう。トムは新しい生き方をしたい。世界は変えられなくとも、自分を変えることはできると思っているが、妹や母が、そしてこれまでに失ったすべての人が恋しくて、悲しみに押し潰されそうになることがある。彼にとっての「ホテル・イグジステンス」は、彼にも「はっきりとはわからぬが、このネズミの穴みたいな街を抜け出して自分が愛し敬う人たちと人生を共にするような場所」(106) である。このように、人は失敗し、悔い、孤独に陥り、人生の再出発は困難である。そこで焦点が当たるのが、失敗や病気や離婚などの人生の危機や苦しみ(suffering)を生きる人々に対して主人公が抱くような共感という感情的資質の重要性である。作者自身が持つ人間に対する共感が本小説を書く動機づけとなり、またプロットを牽引する要素でもあってよい。主人公が自らの人生を内省する際に自虐的に語ることもあるが、小説は温かく、剽軽な登場人物たち、滑稽な言葉遊びやダジャレなどを挿みながら展開する。<sup>4</sup>

本小説が「ポスト9/11小説」と言うには疑問があるもう一つの理由は、"New Sincerity"の思潮である。<sup>5</sup>この傾向は、不毛で有害な、思考の遊戯ともいえるポストモダニズムの文化/文学/批評的状況から脱出するための模索の一つで、アメリカでは以前からみられたとはいうものの、9/11以後顕著になり、映画、哲学など広範囲にわたることになる。9/11という悲惨な事件の結果、ポストモダンの傾向であるパロディーやアイロニーや遊戯性ではなく、人間同士の情愛や絆などの昔ながらの価値観とともに、真摯に世界の現状と向き合い人間のありようを考察しようとしたのである。Wallaceによれば「感傷、メロドラマ、軽信、平凡な甘ったるさ」というような昔からの退屈な価値観をあえて推進するのは新しい「真の反逆者」(193) である。彼は次のように論を終える：

Real rebels, as far as I can see, risk things. Risk disapproval. The old postmodern insurgents risked the gasp and squeal : shock, disgust, outrage, censorship, accusations of socialism, anarchism, nihilism. The new rebels might be the ones willing to risk the yawn, the rolled eyes, the cool smile, the nudged ribs, the parody of gifted ironists, the "How banal." Accusations of sentimentality, melodrama. Credulity. Willingness to be suckered by a world of lurkers and starers who fear gaze and ridicule above imprisonment without law. ...Today' most engaged young fiction does seem like some kind of line's end's end. I guess that means we all get to draw our own conclusions. Have to. Are you immensely pleased. (193)

この文化的潮流のなかで、人間の心理、生、そして虚構について独自の道徳的価値観や信念と動機

を持って、オースターも創作活動をしていたと考えてよかろう。Bollinger が論じるように、9/11は「小説を終わらせる機能を果たしている。」(486)しかしそれ以上の役割も果たしている。中断していたBFを、作者は暗示される9/11事件という外枠組みで囲い込んだ(以後、本論では「9/11」を〈想定される現実の9/11〉という意味で用いる。あくまでBFは虚構であり、このような暴力が及ぼす登場人物や人間模様を描いているからである)。9/11の後付けは、失敗者や名もない大衆の人生譚を書いて残し、彼らの存在を無名性や忘却から掬い上げようとする主人公が到達した最終的決意—物語の中核—に対しても、小説全体に対しても、構造的変化をもたらす。9/11の上書きが、読者の共感を誘う人物像や生の物語を異なるマトリックスにおとしこんだと考えたべきではないのか。

9/11によって、この人類未曾有の出来事と主人公が語ってきた失敗者や普通の人々の物語との重大性が逆転する恐れが生じてしまう。しかし9/11の重大さのためにオースターの本来の構想とテーマを等閑視しては片手落ちであろう。彼が構想していた本来的な物語を中心に、それがどう変容したかをも、いやそれをこそ議論すべきではないのか。彼自身もインタビューで「本質的に、BFは普通の人々への、毎日の生の素晴らしさへの、生きることの神秘と喜びへの賛美("hymn")である」(Hutchisson ed. 165)と語っている。小説の中心的テーマは文学に興味を持ち続け、伝記保険を作って名もなき大衆の生(life)のエピソード、多くの人が持つ苦渋や悲惨や失敗者人生を文字で書き残すことによって、彼/彼女の尊厳と唯一無二の实在が無名と忘却と無意味さのなかに埋没することから掬い上げようとする主人公ネイサンが、語り手として成長していく過程である。この観点から、後付けの外枠組みである9/11が主人公の語り手としての成長と彼の伝記保険の構想に対してどのような影を投げかけるのか、いかにそれを発展あるいは変質させるのか、9/11や人々の悲惨な生一言語に尽くしがたい物語—を語ることの困難、語りえぬものを如何に語るかというメタフィクション的主題に関してどのような示唆を与えているかを考察すべきである。BFをメタフィクションとして読む理由は、小説中で物語の価値とそれを語る方法に焦点が当たっているからである。この視点からみると、デリーロの「ポスト9/11小説」との違いも明確になってくる。インタビューでも述べているように、彼の主要な関心は言語である。<sup>6</sup> BFの書評では、他のオースター小説とは異なり「心温まる」、ニューヨーク三部作やこの小説に続く*Travels in the Scriptorium*とは異なりメタフィクション的要素が薄いあるいは皆無で、最もとっつきやすい小説と評されている。<sup>7</sup> 失敗者や名もなき多くの愛すべき人々に主人公が愛情をもって接し、共感をもって語る内容からは温かみを感じられるであろうし、前述したような喜劇的な語り・要素などからはとっつきやすい、読んで楽しい小説であろうが、むしろメタフィクションとしての意義に焦点をあてるべきと考える。

## 2. 実存主義的問いと〈超越の書〉

大学時代にはトムを秀才で将来文学研究者になるものと信じ、付き合っていて愉快この上ないと

思った友人たちは、今は陥落してタクシー運転手になっている彼を見て、愕然とする。見苦しいほどの肥満になりはじめ、「将来の計画について何も持たないように見える。どのように名誉を回復させるか、どう立ち直るかを一切考えていないよう」なので、大いに戸惑う。さらに彼らが狼狽するのは、「タクシードライバーの話をするときは、常に奇妙な、ほとんど宗教的な言葉で語り、霊的な力とか、忍耐と謙虚さを通して己の道を見出すのが重要だなどと延々と述べたてる」(25-6) ことである。感じも人当たりもよく、知性は鈍化してはいないようではあるが、もはや誰も彼を相手にしたくない。特に女性はそうである。「彼の自己疑念や自己省察、現実の本質をめぐるものとは分かるがこの上なく曖昧模糊とした思索、ためらいがちな態度」(26) すべてが、女性を彼から遠ざけている。よって、今は女性関係も皆無である。失敗者の泥沼・「煉獄」(23) から脱出する契機となったのが、同じ失敗者である Harry Brightman (本名は Harry Dunkel—dark・暗いの意味で、明晰だが実際は暗く犯罪にも手を染めるというアイロニーも巧みである) との出会いである。詐欺で投獄されたこともあるが、金持ちの義父のおかげで、今後妻や子供とは一切関わりを持たないことを条件に、古書店を経営することになる。投獄は運が悪かったからだと考え、ホーソンの手書き原稿で再び詐欺を計画する、懲りない同性愛者である。ハリーに自分の古書店での就職を提案された際、30歳になったトムはタクシー運転手の仕事を擁護して、主張する：

Or traveling across the Brooklyn Bridge at the very moment a full moon rises into the arch, and that's all you can see, the bright yellow roundness of the moon, so big that it frightens you, and you forget that you live down here on earth and imagine you're flying, that the cab has wings and you're actually flying through space. No book can duplicate those things. I'm talking about real transcendence, Harry. Leaving your body behind you and entering the fullness and thickness of the world. (30)

トムによれば、単調な上に密通や性行為など客のいかがわしい光景をバックミラー越しに見ることも、ゲロを吐かれたり排便されたりすることもあるが、タクシー運転手の仕事には「絶対的な恩寵」、ささやかな高揚、予期せざる奇跡の瞬間もある。ニューヨークを流していて満月を見上げると、「目の前にはもうひたすら明るい黄色い円しか見えなくなり、そのあまりの大きさに人は怯え、地上に生きていることも忘れて、自分は空を飛んでいるのだ、空間を飛翔しているのだという気がしてくる。書物では絶対に再現できない、本物の超越だ。…身体を後にして、世界の十全性、全体性に入っていく」(30) と言うのである。禅仏教とも通じる部分があるから、一見、高尚な哲学のように思える。

タクシーでなくてもどんな車で走っていてもそれは可能だというハリーの反論に、トムは厳然と抗する。「疲労、退屈、精神が麻痺するほどの平板さのなかにささやかな自由の感覚が飛び込んでくる。束の間だが、本物の至福が。」至福と同様に、嵌っている苦境や囚われている事柄からの精神的「自由」も得られる。現状、今の自分と環境を超えることができれば、精神的な自由を得て、

異なる考え方や生き方が可能となる。「それにはしんどい退屈な仕事という代償が不可欠だ」(30)と言う。普通の車ではだめで、単調で苦しい仕事の苦役、疲労や退屈や精神がマヒするほどの平板さのなかで突然、超越とささやかな精神的自由の感覚を体験するのだ。トムはこの「真の超越」について言及するが、この超越と自由に至る道を、本論では〈超越/自由あるいは超越の書 (The Book of Transcendence)〉と呼ぶことにする。例えば、現在多くの学術的研究がなされ、巷でも笑いヨガや病院で落語を聴くなど実践もされているように、笑いは現状を克服したり過去の束縛から自由になる方法の一つと考えられるから、〈笑いと忘却の書 (The Book of Laughter and Forgetting)〉というものなら、〈超越の書〉の一つと言える。笑うことによって、迷い人は本来の実存の道に立ち戻ることができる。

しかし、はたしてトム自身は超越への方法やその道程を見出しているのだろうか。「本物の超越、世界の十全性や全体性」などと哲学的言説や概念を述べたてるが、彼はその道を見出すどころか、ハリーに対して自分が主張することの「十分の一も信じてはいない。」(30) それでも頑なに真の超越などと主張するのは、知的な彼の自尊心ゆえであろう。現在のタクシー運転手の「仕事を蔑めば蔑むほど惰性にいつそう固執し、惰性が深まれば深まるほど自分を蔑む気持ちも強まった。」(30-31) 墜ちたタクシードライバーの自分を蔑めば蔑むほど、今の自分に固執してハリーの就職の申し出を固辞する。自分に固執すればするほど、自分を蔑む気持ちも強くなる。かくして失敗者の知性は悪循環に陥り、逆説的に自分を憎み蔑むことを糧として生き続ける。失敗者が陥りやすい傾向の一つであろう。トムのこの精神的状況が示唆するのは、大きな問題の一つがこの堂々巡りと線の時間言説であることだ。今は「新しい時代...ポスト家族、ポスト学生、ポスト過去」であり、「とにかくあの頃のことほうだうだ考えない」(22) と力強く彼は宣言するが、この言こそ彼が過去に固執していることを示唆する。過去、現在、未来と直線的に流れるこの線の時間言説こそが問題なのだ。これを超克して異なる時間言説にパラダイムシフトすることなしに、超越も精神的自由もありえない。例えば、この一瞬を十全に生きられれば、自分というものを超克し、過去の自分にも拘泥しなくなり、精神的な自由も得られるはずだ。禅仏教なら、「今ここを生きる」という生き方であり、時間認識である。

超越/自由のための可能な解決策として、小説中には三つの〈救済の書〉が提示されている。そしてそれらが、メタフィクションとして本小説を読み解く重要な鍵となることに注目したい。オースターの小説技法の巧さの一つに構図的な対比がある。例えば、文学的で言葉に敏感、ダジャレもよく言うネイサンに対して、科学的な思考をし「生き地獄 ("living hell")」などというような「言い古された陳腐な言葉や出来合いの理念ばかり連発する」(2)、彼の一人娘を配している。彼女はシカゴ大学で生科学の博士号を取って大きな製薬会社の研究員をし、夫は大学で教えている。世間的にはエリート夫婦だ。超越のための〈救済の書〉の可能性の一つと考えられるのが、主人公の「人間の愚行の書という名のプロジェクト」(5、"*The Book of Human Folly*")だが、後に小説中には具

体的な愚行と本となったものをイメージして、"Follies"と複数形で言及されることがほとんどである)だ。癌という大病ゆえ絶望的で無気力な生活をする主人公に対する娘の非難に対して、主人公は人間の様々な愚行を書き連ねる「人間の愚行の書」に着手する。これがこの小説 *The Brooklyn Follies* に結実していくと考えてもよい。語ることや日記を書くこと一語りえぬ、あるいは困難なもの言語化—が、内省を通じた人間的成長につながることはつとに知られている。言語化することで問題点が明確になり、現状打開が可能になるからだ。さらに、名もなき愛すべき人々の人生を文字化して残し、個人を忘却の淵から掬い、永遠に生かすことを試みるという高尚な目的も主人公にはある。ネイサン「人間の愚行の書」と三つ巴に、〈絶叫の書〉と〈沈黙の書〉と呼べる方法がこの世で生きる指針として示唆されていること、そしてこれらがメタフィクション的示唆を提供していることを論じたい。

### 3. 〈救済の書〉(The Book of Salvation)

#### 3-1. 〈絶叫の書〉(The Book of Shouting)

ハリーの娘 Flora は19歳までに二度の精神病院入院歴があり、今も回復の見込みは薄い。神経衰弱から鬱病にエスカレートして三度目の入院となる前、まだ自分の父を認識することができたとき、彼に自分の哲学を披露する。彼女によれば「いままで生きていなかった人が生まれ出たことは、確かで疑いようのない真実である。」生死の統計から、41秒に10人新生児が生まれ、58秒に10人死ぬことがわかる。「世界のこの事実を実感するため」一日中自室のロッキングチェアに座り、41秒ごとに「喜べ」、58秒ごとに「悲しめ」と叫ぶ(49)。こうしてすべての生きる人々を寿ぎ、すべての死者を悼む。「喜べ」と「悲しめ」という二語の絶叫は、〈超越の書〉に対する可能な一つの教え・応答であり〈絶叫の書〉と呼ぶことができよう。考えついた経緯と彼女の言説の特徴を知るため、少し長い引用する。

Somewhere or other, she had come across a set of statistics that calculated how many people in the world were born and died each second on a given day. The numbers were stupendous, but Flora had always been good at math, and she quickly extrapolated the totals into groups of ten : ten births every forty-one seconds, ten deaths every fifty-eight seconds (or whatever the figures happened to be) . This was the truth of the world, she told her father at breakfast that morning, and in order to get a grip on that truth, she had decided to spend the day sitting in the rocking chair in her room, shouting out the word *rejoice* every forty-one seconds and the word *grieve* every fifty-eight seconds to mark the passing of the ten departed souls and celebrate the arrival of the ten newly born. (49)

フローラは宗教の教祖でもあるかのように、父のハリーの目を見据えて叫び続ける：

"Rejoice!" she cried out. "Rejoice for the ten who are born, who will be born, who have



been born every forty-one seconds. Rejoice for them and do not stop. Rejoice unceasingly, for this much is certain, this much is true, and this much is beyond doubt : ten people live who did not live before. Rejoice!" (49)

And then, gripping the arms of the chair tightly as she accelerated the pace of her rocking, she looked into her father's eyes and shouted, " Grieve! Grieve for the ten who have vanished. Grieve for the ten whose lives are no more, who begin their journey into the vast unknown. Grieve endlessly for the dead. Grieve for the men and women who were good. Grieve for the men and women who were bad. Grieve for the old whose bodies failed them. Grieve for the young who died before their time. Grieve for a world that allows death to take us from the world. Grieve!" (50)

「死者を悼め、善なる男女を悼め、悪なる男女を悼め、老いて体が思うようにならなくなった老人を悼め、若くして天に召される若者を悼め、我々を引き離す世界そのものを悼め」(50)などと絶叫する彼女のレトリックの特徴は繰り返し、対句、畳みかけるような言説の力強さと速度である。脅迫するようなgrieve(悼め)の濁音や長母音とrejoice(喜べ)の短いキビキビして跳ねるような音の繰り返しも、効果的である。大声で“grieve”や“rejoice”と発音/発話(voice)する人の心理に哀悼の気持ちや喜びと高揚感が生れる。

発話には事実確認と行為遂行の二つの働きがあるとするJ. L. Austinの言語行為論(『言語と行為』1962)を援用すれば、「喜ぶ」、「悼む」という言葉を発すること自体がすでに、その行為を実行していることでもある。さらに、フローラの〈絶叫の書〉においては、「喜べ/悼め」という命令が、行為内容の実現を促すことになる。仏教でひたすら「南無阿弥陀仏」と唱え、その言葉自体になることができれば、自身とその現状を超克でき、新しい道が開けると同様に、この「喜べ/悼め」という言語行為は現実のなかで身動きできない状況の人に変化をもたらし、自身も悼まれ、癒される可能性がある。「喜べ」と命令することによっては、発話/発音する人の心理に喜びと高揚感が生れる効果もある。とすれば、この絶叫の書を精神病患者独特の奇妙で無意味な論理として一笑することはできない。この繰り返される力強い言語音によって、超越の道が開ける可能性があるからだ。しかし同時に、あまりにも激烈な感情と発話音声の主観性過多が本当に、生きていくための教えの書であるかは疑問だ。呪詛するように絶叫して、強い口調で命令することは威嚇であり、心からの自発的行為・発話そして内発的变化にはつながらないであろう。ここで我々は、トムに対する彼女の会話言説が示唆するように、彼女が威嚇を通して思い通りの行動を引き出そうとしたことを思い出さねばならない。彼女はトムに毒づく：「あんたTom Woodだね。あんたのことは全部知ってる。人生の旅半ばにして我暗き森("wood")にありて道に迷えり。...あんたみたいな人間は木ばかり見て森を見れない、何も知らないバカさ。...木("wood")のできてるから善人("good")ってことにはならないだろう？わかる("Comprendo")？あたしは父親に会いに来たんだ。サッサと会

わせろ！」(34) この乱暴な言説からも、傲慢なフローラの絶叫と饒舌が超越のためには邪道であると言わざるを得ない。

### 3-2. 〈沈黙の書〉(The Book of Silence)

絶叫や饒舌の反対に、沈黙がこの世で生きるための〈超越の書〉と考える人もいる。言語音の絶叫と沈黙の対立概念、そしてそれらと文字による「愚者の書」との対比という点で、それぞれが小説中で意義を持つことになる。トムの妹ローリーは音楽バンドに参加していた際、父親がどちらのバンドマンだから特定できない子供ルーシーを産む。ポルノ女優の前歴もあり、その後も転落の人生をたどり、苦渋を味わい続ける。撮影現場での輪姦、いかがわしい宗教者/尊師Bobによるフェラチオの強要、その支持者で夫であったDavid Minor による六ヶ月にわたる監禁など、波乱に富んだ失敗者人生であった。彼らの「聖なる御言葉の神殿 ("the Temple of the Holy Word" 251)」の会衆は60人、辿り着いた修行法は沈黙を保つことである。「<sup>はじめ</sup>太初に<sup>ことば</sup>言あり、言は神とともにあり、言は神なりき」と聖書のヨハネ福音書、第1章第1節に言うように、「『聖なる言葉が神であるなら、人間の言葉には何の意味もない。動物のうなり声や鳥の鳴き声ほどの意味しかない。神を自分たちのなかに吸いこみ御言葉をわがものにするために、人間の虚しい言葉に溺れてはならない。それが犠牲であり、宗派の全員が七日のうち一日、24時間通して全き沈黙を貫かねばならない』」と尊師は説く。教えを实践するうち、「『沈黙の日が週のなかでも一番素晴らしい、充実した時間になってゆき、神が自分の内にあることを実感できる。』」(251-2) この世の空虚な言葉と虚しい生のなかで一日全き沈黙を保つことを通して神を内に実感することが、この世の辛苦を超越していかに生きるべきかという問いの書に対する答えなのだ。

神とともにあるための教えとしては、首肯できる部分もある。しかしこの方法論のいかがわしさは、ローリーの証言からすでに明らかだ。「『普通の教会ではないし、自分をキリスト教徒だと言っているが、どういう種類のキリスト教徒かは明言しない。そもそもあの男[尊師]が宗教なんてものを少しでも大切に思っているかどうかも怪しい。要するに他人を支配したいだけの、根っからのペテン師』」(263)なのだ。この他にも、尊師ボブの人間としての欺瞞—ローリーに対するフェラチオの強制—を通して、また尊師を擁護して彼女を監禁した夫の行為を通して、尊師と彼の教えの欺瞞は明らかだ。教祖の欺瞞を見抜き、「病気だからなどの理由をでっちあげてもう教会へは行かない」と強く、初めて自分の考えを主張する妻に対して、デイヴィッドは「いつものように、悲しげな、保護者ぶった笑みを浮かべて、ごまかしは罪だと言う。」(264) 彼もジェンダー・バイアスを持つ偽の側近宗教者、狂信者である。

我々読者はほどなく、尊師ボブの〈沈黙の書〉が欺瞞であることがわかる。それを信じ込ませる手口は、いかなる反論をも封じ込め、思考能力さえも奪う、沈黙の強制と饒舌である。様々な説を繰り返し語って (voice) 刷りこむ、文字言語と音声言語の協同だ。「ある礼拝日には物質主義を糾弾し、現世の所有物をすべて捨てて清貧に生きねばならないと説くかと思えば、次の礼拝日には身

を粉にして稼げるだけ金を稼げと説く。」そしてそのうち「歌は神の耳に対する冒瀆ゆえ、日曜の礼拝から歌を締め出し、沈黙のなかで神を崇める」(263)と宣言し、「大衆文化はアメリカを破壊するゆえ」(264)、聖書以外のすべての本やTV、ラジオ、電話など音のするものはすべてご法度、雑誌も新聞も音楽も小説も詩も映画も禁止となる。かくして、人が喋れば喋るほど神の声を掻き消し、人の言葉に身に耳を傾けるたびに神の御言葉を蔑ろにしているのだから、週のうちの一日を全き沈黙の日として、神とのつながりを取り戻し、魂の内で神が語る言葉が聞こえるようにするという教義に行き着いたのだ。しかし信者たちは皆、次々と新しい思想やメッセージを繰り出してくる彼を崇拜し、彼の教えに洗脳され続ける。『「無茶苦茶言いまくるけど、犠牲を強いられれば強いられるほど、信者は教えどおりにし、脱会した家族はいない。」』(264) フローラの絶叫の書が音声の魔力と危険を示唆したように、ボブの〈沈黙の書〉に至る思想の展開過程が、その雄弁な音声、信者たちを陶醉させ、彼に従わせた。ヒットラーの演説に酔い痴れたドイツ国民が一直線にユダヤ人殺戮という蛮行に走ったことと同様に、ボブの教義である沈黙も危険な魔力の例だ。

### 3-3. 〈愚行の書〉(The Book of Human Folly)

〈絶叫の書〉と〈沈黙の書〉がまやかしてあるなら、文字言語によるネイサンの「愚行の書」は〈超越の書〉のための教えと言えるのであろうか。

失敗者とはいっても、ネイサンは自分が31年間保険外交員として実績をあげてきたことに自負している。他人の人生に共感でき、人の話を傾聴でき、顧客に気に入られるようになったゆえの業績であろう。保険という死に関わる仕事であったが、人間の生きざまに触れ、自分の美点も発見できた。小説冒頭では「静かに死ぬる場所を探していた」(1) 彼は、癌のショックがあまりにも大きくて、生き延びられるという可能性も信じられず、自分は死んだものと諦めていた。すさまじい病状、耐えがたい治療の試練、「頭髪も気力も仕事も、離婚で妻も失い、どう生きてらよいか分からず、自分の人生物語が始まった場所であるブルックリンへ無意識に回帰した」(3) ものの、「もう一度生き始めるすべを模索するため」(4)、何かに積極的に関わらねばならなかった。「怠惰でなく、積極的に何かに関わって毎日を生きたらどう?...こんな父さんといっしょにすごすのは地獄。母さんが離婚したのも無理ない」(2) と娘からなじられた主人公は、怠惰な日常と決別し、自分が重要な仕事に携わっているのだという錯覚を作り出すために、大仰な命名のプロジェクトを開始する。「人間の愚行の書」である。「人間の愚行—あらゆる失態、ヘマ、恥、愚挙、粗相、ドジをできるだけ簡潔で明快な言葉で」(5) 書き綴る。しかし「書」とは言うものの人生のための啓蒙書というようなものではさらさらなく、当初の目的はただ単に自分自身の愚行を書き連ねることであり、紙切れにメモする程度の「ランダムな書きなぐりの集成、互いに無関係な逸話のごたまぜ」から始まった。話が一つ書き上がるたびに段ボール箱に放り込んでいき、自分の愚行の後は、知人の愚行を、それも尽きてしまったらありとあらゆる時代の人間の愚行を書き記す。時間つぶしを兼ねるが、そのうち笑いの種にも出会うだろうと思いながら、自分でもなるべく楽しむ。「己の魂をさらけ出すとか、

内省に耽溺する」(6) というような真剣なものでなかった。

こうして始めたプロジェクトだが、このプロセスから我々は書くことの意義や秘密―何をいかに書くか―の一端にも触れることができる。この小説をメタフィクションと読む所以である。ネイサンは「目を閉じ、思いが勝手にさ迷い出るに任せる強制的リラックス法で、遠い過去の素材を、もう永久に失われたと思っていた記憶を、相当掘り上げることができた。」(6) このようなことを続けられれば、人は過去の再考・熟考を通して現在の自分や自分が抱える問題や、ひいてはその原因や解決方法に思い至ることができる。書くことの効用は内省を深め、自分を対象化することで客観視し、ひいては自身をより深く明確に理解できるようになることである。これは、前述したように日記を書くことと同様の効用として、周知の事実だ。

主人公はランダムな物語のメモの集積が範疇ごとに分けられると気づくと、約一ヶ月後には、一つだけの箱から複数箱システムに切り替えて分類・整理することで、一貫した話としていくつもの物語をまとめることができた。「言い間違い、肉体上の災難、挫折に終わったアイデア、社交場のヘマなど」(7) のテーマ別だ。興味は、最初は日常生活上のドジや喜劇を書くことで、大いに楽しみもした。しかし二ヶ月もすると、「暗い気分が襲われること、孤独、意気消沈する出来事や陰惨な話、『残酷な運命』」(8) にまつわる話抜きではこのプロジェクトは完遂しないことが分かる。このようにして、メモや逸話のごたまぜから物語の多様なテーマについて思いが至り、また深まってゆき、名もない人々の人生譚に焦点が定まってゆく。それにつれて物語る方法も洗練されていく。物語作家には自然なプロセスだ。

自分が「情けない、孤立した、何の生きる目的も持たない、人肉のばらばらな寄せ集め」と考えると「自己憐憫」(62) に陥ったネイサンも、トムから「伯父さんは本物の作家になりつつある。…何年も砂漠をさ迷った末に天職を見つけた。もうお金のために働く必要がなくなった今、もともと為すべきことをやっている。…書くということには何のルールもない。…書くことは誰がいつ雇っても不思議ではない病、心の感染症、インフルエンザと言ってもいい」(147-48) と称賛・激励されるようになる。トムが言うように、書くことは誰もが持つ欲求であり、そして誰もが書けるのだ。本小説は主人公が語り手として成長していく過程、物語ることの意義、なぜ物語ろうとするのか、語りえない/困難な物語をいかに語るべきか等についてのメタフィクション的考察を提示する。

語り手としても人間としても、ネイサンは成長した。「ブルックリンにこそそ戻ってきて一年もたたない、恨みがましい独り身男、燃え尽きて、生きる目的など何も残っていないと思っていた人間」である自分、「盆暗にして愚者、[肺癌で] くたばるのを待つことしか頭になかった」自分が、今や信頼厚い「打ち明け話の聞き手にしてカウンセラーだ。」もともと、彼自身自嘲気味に語るように「好色な未亡人の愛人に、危険に瀕した乙女を救う遍歴の騎士に変身を遂げ」(284) もした。すると、彼を取り巻く環境も、人々も変わっていく。主人公を含め、一族の人生や運も上向きは始める。流産し、夫に不倫されている娘は再び妊娠し、トムも結婚して子供ができる予定だし、自分

も再婚した。しかし食道炎で病院に担ぎこまれ、ネイサンは緊急治療室で三人の患者と出会う。53歳のエジプト生まれのリムジンサービス運転手で子供や孫たちに囲まれて幸せに暮らしているOmar Hassim-Ali、39歳の屋根職人Rodney Grant、そして78歳の元大工Javier Rodriguezである。病院に担ぎ込まれた、これらの名もない普通の人々の生—生きて病院を出られるもあり出られぬもある—に接するうちに、ネイサンは元保険外交員らしく、伝記保険を思いつく。有名になった発明家は発明品のなかに、建築家は建築物のなかに生き残るが、普通の人々は死ねば何も残らず、時とともに忘れ去られる。よって、名もない普通の人々の人生を物語として文字化し、彼/彼女の存在を、そして彼/彼女らの人生を言葉のなかで蘇らせるのだ。そうすれば肉体は滅しても文字のなかで永遠に残る。人々の人生物語を書き、新しいタイプの伝記保険として売り出す構想である。

Was I crazy to dream that I could make something of this far-fetched project? I didn't think so. What young woman wouldn't want to read the definitive biography of her father—even if that father had been no more than a factory worker or the assistant manager of a rural bank? What mother wouldn't want to read the life story of her policeman son who was shot down in the line of duty at age thirty-four? In every case, it would have to be a question of love. A wife or a husband, a son or a daughter, a parent, a brother or a sister—only the strongest attachments. They would come to me six months or a year after the subject had died. They would have absorbed the death by then, but they still wouldn't be over it, and now that everyday life had started for them again, they would understand that they would never be over it. They would want to bring their loved one back to life, and I would do everything humanly possible to grant their wish. I would resurrect that person in words, and once the pages had been printed and the story had been bound between covers, they would have something to hold on to for the rest of their lives. Not only that, but something that would outlive them, that would outlive us all. (302)

ここでネイサンは普通の人々のささやかな日常や幸福や身近な人々との交流・関係・愛情を称賛しながら、自分がその名もなき愛すべき人々に寄り添ってそれぞれの唯一無二の人生譚を文字化し、本という形で残して彼/彼女らの存在と尊厳を具現化・具体化・身体化し、その結果、永続化させる構想を説明し、「本の力を過小評価してはならない ("One should never underestimate the power of books.")」(302)と断言する。自信満々である。しかし、はたしてそれは実現するであろうか。そして人生譚と彼/彼女の実存を文字化して固定化 (pin down) することがはたして望ましいことだろうか。人物も人生も世界も常に移り変わる全体の一部である。換言すれば一即全、全即一だ。またそれらはいわば流体と言ってよいものではないのか。

#### 4. 迫りくる9/11

—語りえぬ/語ることが困難な物語をいかに語るか、メッセージをいかに伝えるか—

退院を許され街路に出て新鮮な空気のなかで青空を見上げる時、ネイサンは生きていることが嬉しくてたまらず、その歓喜の念を大声で叫んで表現したい。しかしほどなく、普通の人々のささやかな日常や幸福は容赦なく打ち砕かれる。精神的な平安や家庭生活という点で回復しつつあるネイサンに対しても、そして彼のささやかな構想や試みや意欲に対しても打撃を与え、彼の伝記保険の計画は少なくともしばらくは頓挫するだろう。9/11はいったん、ネイサンと彼の構想を宙ぶらりん状態にすると推測される。それほど大きな力と衝撃を持つのだ。罪のない三千の普通の人々の命と日常が不条理にも一瞬のうちに強奪され、言語を超える、言葉にならない苦しみや悲しみなどの無数の物語を生む。となれば、語り手として成長しつつあるネイサンも、それらをいかに語るかという本来的な難問を避けられなくなるはずだ。ニューヨークの名もない人々の群像のなかで、人間として、そして語り手としてのネイサンの成長という本来の中核物語は、9/11によって別の文脈のなかに位置づけられる。このメタフィクションに意味構造の変化をもたらす衝撃的で決定的な9/11は、多くの人々の人生に終止符を置くのと同様に、人生譚の文字化という彼の構想に対しても一時の停止と再考を促すのみならず、語りえぬ物語をいかに語るかという、語りの根本的なメタフィクション的難問に彼を立ち戻らせるはずだ。9/11は彼の伝記保険や *Bios Unlimited* という新会社の立ち上げに対して否と引導を渡すわけではないにしても、彼はこの難題に立ち返らねばならない。それでは言葉にならない物語をいかに語ればよいのか。小説中にいかなる示唆が準備されているのだろうか。語りえぬ物語を文字言語が十全に語りつくすことができないなら、いかにして言うに言われぬ思いやメッセージを伝えることができるのか。そこで考察したいのが、トムによって語られる Franz Kafka (1883-1924) の逸話とハリーの同性愛の愛人だった Rufus Sprague のハリー葬儀の際の哀悼パフォーマンスである。

##### 4-1. カフカの手紙—文字言語と音声言語

1923年秋、健康は衰え、食料不足、政治暴動など社会情勢は悪かったが、カフカは初めて心から愛した唯一の女性とベルリンで幸福に暮らしていた。ある日、散歩の途中の公園で泣き叫ぶ女の子に出会う。人形をなくしたというので、その人形の身に何があったかをめぐる物語を捏造して少女に語ることにする。『人形は旅に出たよ。家に置いてきたが、僕に手紙をくれたから知っているんだ。』あまりに真に迫った言い方なので、少女はどう考えていいかわからないほどだ。…帰宅するとカフカはただちに、『自分の作品を書く時とまったく同じ真剣さと緊張で』、少女への手紙を書き、翌日公園で少女に手紙を読んであげる。」注意しなければならないことはカフカが『彼女を騙すつもりは毛頭ないこと、美しく説得力ある嘘を思いつければ、偽りであってもそれを捏造する行為が彼女の喪失を異なる現実(リアリティ)にすり替えることができる』から、これは『本物の文学的努力であること』だ。」しかしさらに重要なことは、少女がまだ読み書きができないので、想像し

た人形の言葉を口述して伝えたことである。少女は手紙の文字を読んで、人形の言葉の背後にある状況や気持ちを知るわけではないのだ。カフカは人形の言葉を代弁する：「『いつもおなじひとくらすのにつかれたから、そとのせかいをみて、あたらしいともだちをつくりたい。あなたのことをきらいになったわけじゃない。…まいにちてがみをかいてなにをしているかしらせませう。』」(154) ゆっくり、やさしく、感情をこめて、人形の声でカフカが少女に語りかけたであろうことが想像できる。こうして彼は三週間手紙を書き、毎日公園で手紙を読み上げ続ける。

人形は大きくなり、学校へ行き、友達もたくさんできる。カフカは人形が少女のもとに帰ってくるのは難しそうだとすることをにおわせ、永遠に別れる心の準備をさせる。カフカの恋人によれば、「『彼は細部に痛々しいほどの注意を払い、正確で、滑稽で、人を夢中にさせる文章になるよう努めた。』」相手が子供だとはいえ、真剣な文学的営為なのだ。カフカは人形が恋に落ちた若者と結婚したという結末にして、婚約パーティ、森での結婚式、現在の暮らしぶりも少女に語る。幸せになった人形の今を知ったこの時点で「『少女は人形がいなくても寂しくない。カフカが代わりに別の何かを与えてくれたからであり…悲しみも癒されていく。彼女には物語がある。』」かつては友で今は幸せになった人形の物語と、それを知った少女自身の喜びと慰めの物語だ。この逸話が示唆するように、「『架空の物語世界のなかで生きる幸運に恵まれれば、この世界の苦しみは消滅する。物語が続く限り、現実とはもはや存在しない。』」(155) 少女のかなしいリアリティに現実以上のリアリティを持った虚構が取って代わる。物語はこのような効果を持つ。虚構は現実以上のリアリティを持つのだ。少女でなくとも、虚構なしでは人は生きづらからう。

物語は文字というより音声によって身体化され、少女の身体に届いたことに注目しなければならない。伝達は身体的コミュニケーションなのだ。文字が物語を身体化して伝達・交換されたのではない。書かれた文字だけでは不可能だ。読み書きができない少女ゆえにこのことが可能だったわけでもない。大人であっても、実際には身体的コミュニケーションなしでは心は動かない。語りえぬ/語ることが困難な物語はその音声言語によって伝えることができる。意味はもちろん重要だが、声音や抑揚やスピードや優しさなど、そして登場人物になりきって物語を身体化して語ることも、同様に決定的な結果を産むのだ。

#### 4-2. ホモの愛人による哀悼パフォーマンス—ジェスチャーは雄弁な愛のことば

語りえぬ物語を語る表現の別の例を、ハリリーの突然の死と火葬の後の葬儀に遅れて到着した Tina Hott、実は彼のホモの愛人であるルーファスのパフォーマンスでみてみよう。彼はハッとするほどの美人で、ネイサンが今までに見たこともない「絶対的な女らしさの権化」、「現実の女性の領域にある、いかなるものをも超えた、女性的なるものの理念そのもの」である。とはいっても、美しい身体の内には「女性性の内なる光」も保持しながら、彼は Lena Horne のミュージカル『ショー・ボート』の挿入曲「あの人を愛さずにはいられない」の音楽を流し、それを口パクしながら葬式でパフォーマンスする。「堂々たる、かつ馬鹿げた、笑える、かつ胸のはり裂ける、感動

的かつコミカルな...そうしたもののすべてでありかつそうでないもののすべてである。...歌詞を喉の奥から絞り出すふり続けながら、両腕のジェスチャーが雄弁だ。顔はやさしさと愛情に満ち、目は悲しみの涙で濡れている。葬儀に参列していた一行は釘付けになって立ちつくし、彼女と一緒に泣くべきか、それとも笑うべきか分からずにいる。」(221-23)

It was magnificent and absurd. It was funny and heartbreaking. It was moving and comical. It was everything it was and everything it wasn't. And there was Tina, gesturing with her arms as she pretended to belt out the words of the song. Her face was all tenderness and love. Her eyes were wet with tears, and we all stood there transfixed, not knowing whether to cry with her or to laugh. As far as I'm concerned, it was one of the strangest, most transcendent moments of my life. (222-23)

ルーファスのパフォーマンスは「堂々としてかつ馬鹿げた、可笑しくかつ胸が張り裂ける、感動的でかつコミカル」というような言説で説明できるかもしれないが、「同時にそうではないものすべて」(222)である。このような二元論を超える、言語で説明するのが困難なものではあるが、ハリーへの愛情と哀悼の念は確かに伝わってくる。メッセージは文字言語やその音声で伝わるとは限らない。その説明も言語で可能だとは限らない。ルーファスの両腕のしぐさが、身体言語が、彼のハリーに対する思いを雄弁に語る。今ネイサンは「奇妙な、日常を超越した瞬間」(223)を体験している。文字による分別や二元論言説を超えた世界にいるのだ。

#### 4-3. 迫りくる9/11が上書きするもの

ネイサンは人生を生きるための〈超越の書〉に対する〈救済の書〉として、「ブルックリンの愚行」プロジェクトのメモ書きから始め、さらには人生譚を書き記して伝記保険という形で文字化し、懸命に生きる名もなき人々の尊厳と人生を掬い上げる構想を持つに至った。しかし9/11で、甥からは本物の小説家だと賞賛される彼の洗練されつつある言葉も、巧みになっていく語り方も、様々な人生物語への共感と人間理解も、伝記保険という形で彼らの人生と実存を掬い上げて永遠のものにするという彼の構想も、新会社設立の企ても、全てが中断される。これまで彼は文字言語に何の疑いも持たずに人々の物語を語り、これが独創的な伝記保険構想を実現させるための言語だと思っていたら。しかし9/11の暴力的介入により、彼は文字言語では語りえぬ無数の物語の存在を知るはずだ。9/11の上書きによって、彼は語りや虚構や言語に関わるメタフィクション世界の泥沼に足を踏み込んだ。驚愕、恐怖、怒り、人類に対する絶望、そしてこれまで当たり前だと思い語り続けてきた所与の制度的言語で語ることの無力感が、彼を打ちのめすだろう。しかし同時に、彼は他の〈ことば〉の存在を思い出すはずだ。彼はトムが語ったカフカの手紙の生き生きとした音声言語も、ルーファスのパフォーマンスの身体言語も既に知っている。物語を音声と身ぶり・ジェスチャーによって身体化した言語と言ってもよい。物語やメッセージや感情は文字が伝える意味内容のなかのみ存在するわけではない。声のなかに、身体の動きのなかにも存在する。いやそこにこそ、身体



化された言語のなかにこそ存在するのだ。文字言語であってもそこから発せられたものでなければ受け手に響かない。ただし、声とは言っても、フローラの〈絶叫の書〉や偽宗教者の〈沈黙の書〉—音声言語の濫用/悪用 (abuse) とその対極の沈黙—が、真の〈救済の書〉だとは限らないことが示唆するように、音声言語すべてが望ましいものであるとは限らないし、その対極として沈黙すればいいわけでもない。しかしそれでも、音声言語や身体は、文字言語と同様に、あるいはそれ以上に、普通の人々とその尊厳と人生を語るための可能性を秘めた〈ことば〉なのだ。希望は声のなかに、身体と身体言語—身体化された言語—のうちに存在する。その効果については、カフカとルーファスの逸話で証明済みだ。前者は人形をなくした少女に人形の声そのものになって語りかけることによって、後者は歌詞に合わせて自分の身体に雄弁に語らせることによって、メッセージを伝えた。身体化された言語は確実に届くのである。

最終章「Xは現在地を示す ("X MARKS THE SPOT")」(303) では、登場人物たちも読者も9/11を経験することになる。文字ではかつてや元～のex- と現在地を示す×は異なる。一方、音声言語では両者とも/eks/であり、分別されていない。文字言語では意味が排他的に確定 (pin down) されるが、音声言語ではバフチンの言うような多声性<sup>8</sup>を、そして表象可能性を、保持している。それゆえ常に変化する生や物語を語るには文字言語では限界があり、音声言語や身体言語がその力を発揮するのだ。しかしそれでも、9/11のような出来事が起こって、これまでにない語りえぬ物語に遭遇するだろう。我々はそれを語る可能なくことば>を探求し続けなければならない。生 (life) を、そして人間を語ろうとする語り手たちは<ことば>を模索し続けねばならない。ルーファスは口パクで「魚は泳ぐっきゃない/鳥は飛ぶっきゃない/あたしは一人の男を死ぬまで愛するっきゃない ("Fish gotta swim, birds gotta fly/ I gotta love one man 'til I die")」(223) と歌った。この歌詞のように、物語の語り手は語り続けるしかない。元～、かつての～ (post- ) というような線的時間言説にとらわれないで今・ここ・この瞬間をただひたすら生きることが失敗者人生を克服して再出発する方法だったように、物語自体になるまで語り続けねばならない。そして、それができる者のみが語り手の名に値するのだ。

「普通の人々への、毎日の生の素晴らしさへの、生きることの神秘と喜びへの賛美」(Hutchisson ed. 165) を念頭にBFを書いたオースターが描いたのは、文学に興味を持ち続け、伝記保険を作って名もなき大衆の生 (life) のエピソード、多くの人々が持つ苦渋や悲惨や失敗者人生を文字で書き残すことによって、彼/彼女の尊厳と唯一無二の实在を無名と忘却と無意味さのなかに埋没させられることから掬い上げようとする主人公ネイサンが、語り手として成長していく過程である。後付けの外枠組みである9/11は彼の語り手としての成長と彼の伝記保険の構想を一時棚上げにするであろう。9/11がもたらす凄絶で言語に尽くしがたい物語を語ることの困難、語りえぬものを如何に語るかというメタフィクション的問題に彼も直面することになるからだ。しかし彼は、カフカが人形をなくした少女に人形の声そのものになって手紙をやさしく読み聞かせたことや、パートナーを

失った男の身体言語による哀悼のメッセージのエピソードから、文字言語以外の、それ以前の〈ことば〉の存在を知っている。制度的言語の始原にはこの沈黙の〈ことば〉が、命や〈ちから〉があるのだ。今しばらくは言葉を失っていても、またこれから言葉にならない物語や思いをどんなに経験しても、彼は人の生や人物を語る方法を、〈ことば〉を模索し続けるであろう。このように、語り手・主人公が共感をもって人物像を語る言述からは温かみを感じられ、そして喜劇的な語りや要素などからはとっつきやすく、読んで楽しい小説ではあろうが、BFはメタフィクション的洞察にも富んだ小説である。そして9/11の上書きは、群像型小説を書くというオースターの元々の意図から、文字言語と身体化された言語というメタフィクション的問題に焦点を移した。それは〈超越の書〉と三つの〈救済の書〉—〈絶叫の書〉〈沈黙の書〉、主人公が書く「人間の愚行の書」—を配した、緊密で巧みな構成のなかで表現されているのである。

## 註

1. Bollinger によれば、その他の小説には村上春樹、Jonathan Safran Foer, Art Spiegelman, Dave Eggers の作品があり、*Modern Fiction Studies* は第57巻3号 (Fall 2011) で特集 "Fiction After 9/11" を組み、*Falling Man* や Foer などの論考を掲載している。上岡も DeLillo や Foer など様々な作品を論じている。9/11あるいは暴力を扱った評論としては Donn, Lee-Potter, O'Gorman, Žizek など参考になるが、本論では9/11の扱い方が異なる。メタフィクションとしてオースターの本小説を論じるのが目的である。また9/11が主要な関心事なら、トラウマ記憶を物語記憶に変換してそれを乗り越える手助けをするセラピーの方法や言語の扱い・示唆もテーマとして考えられるが、この小説には見られない。

2. この小説は『ブルックリンの愚行の書』と訳すことも可能であろう。ブルックリンで行われたテロリストたちの愚行と、愛すべき失敗者/愚者たちと彼/彼女らの共感可能な愚行を意味する。

3. 第41代大統領の Bush Sr. の大統領就任期間は1989-93、第43代の Bush Jr. のそれは2001-9である。*Man in the Dark* (2008) でも世相を反映した描写や言及が見られる。本小説でも、政治、経済、寛容、貪欲という点に関して、トムにアメリカ社会や世界の邪悪さに対する怒りを語らせたり、間違っただけで再選されたブッシュ大統領への言及がある。以下のオースターの言葉からも、この頃の政治や世相に対する彼の反応や思いが推測できる。

These past eight years have been about the worst that I can imagine. For the first time as a writer I've addressed, here and there, the situation that we're living through. I'd never done that before and I guess because I've been so alarmed, so distraught, the pressure of this unhappiness has spilled over my work at times. If McCain wins, I feel like going into a cellar for the next four years or going out in the streets every day and screaming. (*The Guardian* 2008; Ciocia and González eds. 43)

4. 滑稽な要素としては、例えばネイサンが「シナモンレーズン・ベーグルを注文するつもりがシナモン・レーガン」と言うと、言い間違いに対してすかさず店の男が「それは扱っていませんが、パンパーニクソンはあります」と、当意即妙に返したこと (5) が挙げられる。ダジャレも多く、楽しめる。主要な登場人物であるNathan, Tom, Harryに共通するのがユーモアや言葉遊びであるが、ハリーの言としては以下の例が挙げられる：

Harry pressed a finger against his chin, striking the pose of a man lost in thought. "How interesting. Tom Wood and Nathan Glass. Wood and Glass. If I changed my name to Steel, we could open an architecture firm and call ourselves Wood, Glass, and Steel. Ha ha. I like that. Wood, Glass, and Steel. *You want it, we'll build it.*"

"Or I could change my name to Dick," I said, "and people could call us Tom, Dick, and Harry."

"One never uses the word *dick* in polite society," Harry said, pretending to be scandalized by my use of the term. "One says *male organ*. In a pinch, the neutral term *penis* is acceptable. But *dick* won't do, Nathan. It's far too vulgar."

I turned to Tom and said, "It must be fun working for a man like this." (57-8)

5. その他に9/11以後アメリカで活発になった傾向として、岡本によれば、無神論ムーブメントがある。科学主義の立場から神の存在を否定する考えである。世俗的テロリズムは宗教に起因し、そんな宗教を信じるのは亡想、呪縛であるとする。(149)

6. 例えば、DePietro ed. 140でデリロは次のように語っている：

At some point, you begin to write sentences and paragraphs that don't sound like other writers'. And for me the crux of the whole matter is language, and the language a writer eventually develops. If you're talking about Hemingway, the Hemingway sentence is what makes Hemingway. It's not the bullfights or the safaris or the wars, it's a clear, direct, and vigorous sentence. (140)

7. 書評としては、Hitchings, Minzesheimer, McLaughlin, などが参考になるが、単行本には *Oracle Night* (2004) と *The Brooklyn Follies* (2005) で「大都会における友情と家族のテーマに戻った」(Brown 94) とする論もあり、Paolo Simonettiはポストダニズムとリアリズムの関係に言及して、以下のように議論している。

In his post-9/11 novels Auster has tried, like Powers, to "reconcile postmodernism and realism and escape the narcissistic inward spiral of self-referring fiction", in order to cope with the traumatic events of recent American history, and to reconfigure that "neutral territory" dividing the narrator from the "Romancer", the space of biography from the territory of fiction-making. (Ciocia and González eds. 32)

これらの議論とは異なり、本論はメタフィクション性に焦点を当てたものである。

8. バフチンについては『ドストエフスキー論—創作方法の諸問題』を、また評論としては桑原、阿部、川端 他、その他を参考にした。

#### 引証文献

- 阿部軍治 編。『バフチンを読む』。東京：NHKブックス、1997。
- 飯野友幸 編。『ポール・オースター 現代作家ガイド1 増補改訂版』。東京：彩流社、2013。
- Wallace, David Foster. "E Unibus Pluram : Television and U. S. Fiction." *Review of Contemporary Fiction*, 13 : 2 (Summer 1993) : 151-94. Web.
- Auster, Paul. *The Book of Illusions*. London : Faber and Faber, 2003.
- . *The Brooklyn Follies*. London : Faber and Faber, 2006. なお、柴田元幸 訳『ブルックリン・フォリーズ』（東京：新潮社、2012）を参考にさせていただいた。
- . *Man in the Dark*. London : Faber and Faber, 2009.
- . *Oracle Night*. New York : Henry Holt and Co., 2003.
- . *Travels in the Scriptorium*. London : Faber and Faber, 2007.
- Austin, J.L. *How to Do Things with Words*. Cambridge : Harvard UP, 1962.
- 岡本裕一郎。『答えのない世界に立ち向かう哲学講座—AI・バイオサイエンス・資本主義の未来』。東京：早川書房、2018。
- O'Gorman, Daniel. *Fictions of the War on Terror—Difference and the Transnational 9/11 Novel*. New York : Palgrave Macmillan. 2015.
- 上岡伸雄。『テロと文学—9.11後のアメリカと世界』。東京：集英社、2016。
- 川端香男里 他。『ミハイル・バフチンの時空』。東京：せりか書房、1997。
- 桑原隆。『バフチン新版—〈対話〉そして〈解放の笑い〉』。東京：岩波書店、2002。
- Ciocia, Stefania and Jesús A. González eds. *The Invention of Illusions : International Perspectives on Paul Auster*. Newcastle upon Tyne : Cambridge Scholars Publishing, 2011.
- Žižek, Slavoj. 中山徹 訳。『暴力—6つの斜めからの省察』。東京：青土社、2010。
- Donn, Katharina. *A Poetics of Trauma After 9/11—Representing Trauma in a Digitized Present*. New York : Routledge, 2017.
- DePietro, Thomas ed. *Conversations with Don DeLillo*. Jackson : Univ. Press of Mississippi, 2005.
- DeLillo, Don. *Falling Man*. New York : Scribner, 2007.
- . "In the Ruins of the Future : Reflections on Terror and Loss in the Shadow of September." *Harper's Magazine* (December 2001.) Web.

- Huchisson, James M. ed, *Conversations with Paul Auster*. Jackson : Univ. Press of Mississippi, 2013.
- Bakhtin, Mikhail Mikhailovich. 新谷敬三郎 訳。『ドストエフスキイ論—創作方法の諸問題』。東京：冬樹社, 1974。
- Hitchings, Henry. "Warmer Weather in Austerland." *Times Literary Supplement* (18 Nov. 2005) : 21.
- Brown, Mark. *Paul Auster*. Manchester : Manchester UP, 2007.
- Bollinger, Heidi Elisabeth. "The Danger of Rereading : Disastrous Endings in Paul Auster's *The Brooklyn Follies* and Jhumpa Lahiri's *Unaccustomed Earth*." *Studies in the Novel* 46-4 (Winter, 2014) : 486-506.
- McLaughlin, Robert L. "Review of *The Brooklyn Follies*." *Review of Contemporary Fiction*. (2006) : 146-7.
- Minzesheimer, Bob. "Search for Solitude Takes Detour in 'Brooklyn Follies.'" *USA Today* (16 Feb. 2006) : 12.
- Lee-Potter, Charlie. *Writing the 9/11 Decade—Reportage and the Evolution of the Novel*. New York : Bloomsbury, 2017.